

ふじみ野郷土カルタ競技ルール

1 協議の前に

この「ふじみ野郷土カルタ」大会（以下、「カルタ大会」と称する）は、勝負にこだわることなく、ふじみ野市の美しい自然・文化や産業等を心にえがきながら、ルールを守って、礼儀正しく、仲よく学ぶように指導することが大切である。

2 競技の仕方

(1) 競技の種類

この「カルタ大会」は、次のような種目で競技が行われる。

団体競技 3人1組でチームを編成する。

- 競技は、3人1組で対戦する

個人競技 1人対1人で対戦する。

- 個人競技の場合は、交代要員が認められていないので、試合途中で試合続行不可能と担当審判員が判断したときは、棄権として処理され、相手の選手に勝ちを与える。

(2) 競技に必要な係

進行係

進行係は、「かるた大会」の運営をよく把握して、進行を敏速にするよう努める。人員の配置は、主になる者1人と副として若干名を置く。

読み手

読み手は、競技進行に最も重要な役割であり、はっきりとした言葉と声で読み上げなければ、競技中のトラブルを招く恐れがある。

審判員

審判員は、各対戦試合に1人配置し、担当競技の判定を責任をもって処理し、試合終了後、その結果を記録表に記入し、記録係に提出する。

また、競技上の問題点やトラブルが発生したとき、その他試合の進行を妨げるような問題が発生したときには、旗を上げ、「タイム」と言って試合をストップさせ、進行係に知らせる。なお、審判員は、試合を公平に判定し、自信をもって判断をくだすように努める。

記録係

記録係は、審判員から受け取った記録の確認をし、試合の結果を敏速に把握して、正しく記録する。また、競技の円滑な進行に配慮して、大会関係者・選手に不信感を持たせないようにする。

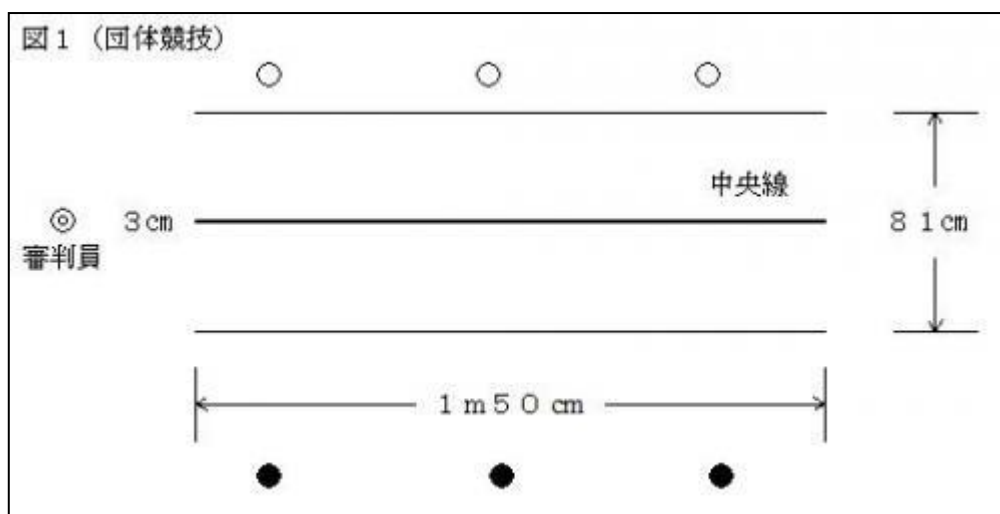
※以上の係の他に、大会運営上の係分担は、大会の状況により増減があっても支障はない。

3 競技会場の準備

競技会場は、出来るだけゆとりを持って設定する。

団体競技の場合 (図 1)

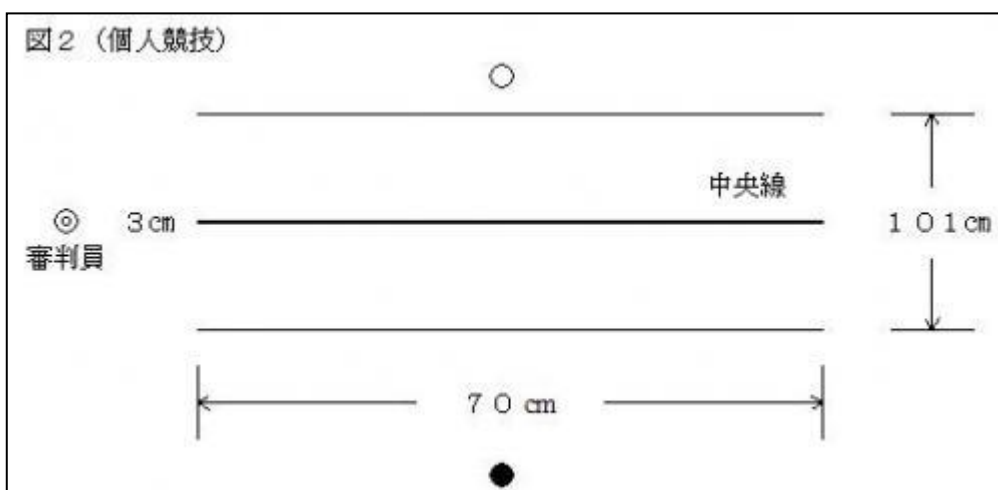
3人が向かい合って一列に並ぶ。この陣の幅は1.5メートル以内で、3人が適当な間をおいてラインの手前に、膝を20cm程度開いて座る。相手チームとの間は、膝頭から81cmの幅をとる。前傾姿勢は45度以上傾けてはいけない。手を膝の上に置くのはいいが、膝の上に肘を置いてはいけない。コートの中真ん中に3cmの中央線を引いて、それを挟んでかるたを並べる。



個人競技の場合 (図 2)

1人で向かい合って座り、陣の幅は70cm以内とする。

相手チームとの間は、膝頭から101cmの幅とし、コートの中真ん中に3cmの中央線を引く。



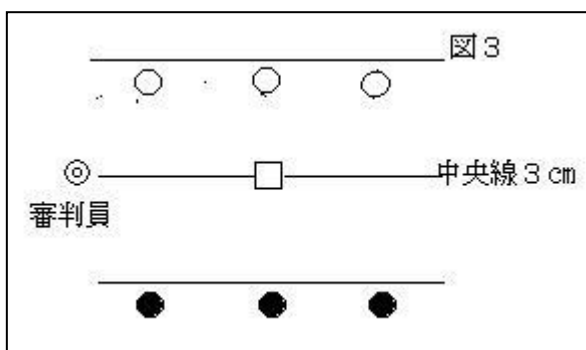
4 競技の進行方法

(1) 試合を始める前に

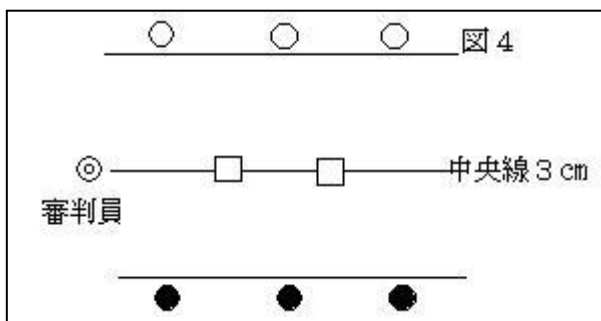
対戦チームを所定の位置に靴を脱いで座らせ、進行係の合図で、お互いに礼をさせる。

(2) 取り札の並べ方

- ア 進行係の合図で、担当審判員は取り札を中央に置く。(図3)

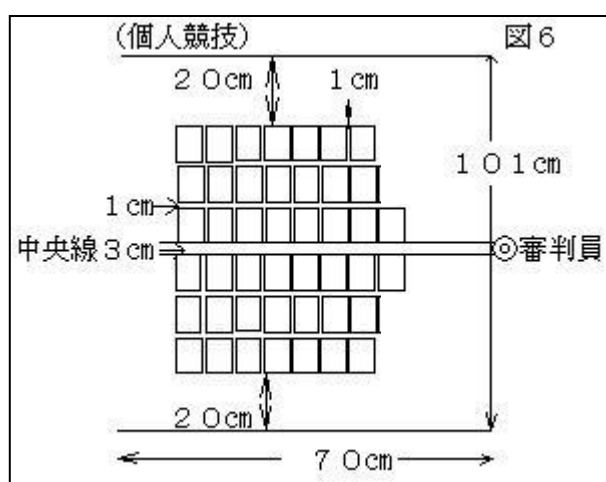
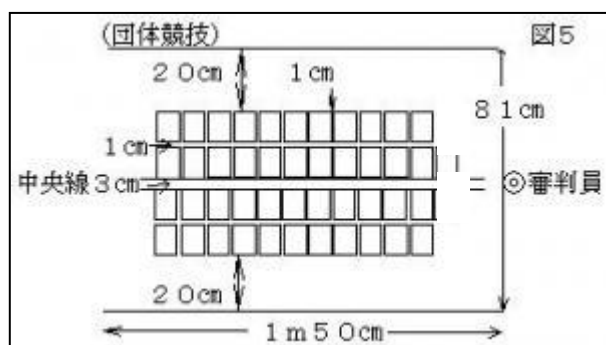


- イ 団体戦は真ん中の人、個人戦はお互いに進行係の合図で「ジャンケン」をさせる。
- ウ 「ジャンケン」に勝った人が真ん中に 22 枚ずつに分けて、少し離して置く。(図4)



- エ 「ジャンケン」に負けた人は、真ん中に置いてある取り札のどちらでもすきな方を取り、残った方の札を勝った方が後から取る。
- オ 進行係の合図で、真ん中の人自分の陣内の審判側上段よりすみやかに並べる。他の2人は、記憶の体勢に入る。(団体は2段、個人は3段) 札と札との間隔は、左右・上下とも 1cm 程度離す。相手チームとの間隔は 3cm 程度離す。

(図 5、6)



(3) 試合の方法

- ア 主進行係の合図で「取り札」を並べる。記憶時間は、並べ初めから5分以内とする。
- イ 読み札は必ず2回繰り返し読む。「やく札」は、最後の2枚には残さない。
- ウ 試合が途中で停止し、再開するとき、読み手は「続けます」とことわってから次の札を読む。
- エ 取り札が最後の2枚になったとき、どちらの札が残っても、中央に横30cm程度離して並べる。ただし、団体戦の場合は、3人中、真ん中の1人が残って、2人は後に下がり、2枚の札を争う。このとき、読み手は、「から札」を2回読み、それが予告となり、次に読まれる札が取り札となる。
- オ 最後の2枚のうち、1枚を取った方が、残りの札を取る。ただし、最後の2枚でお手つきをしたときは、2枚は相手の札になり、更にお手つきとして手持ちの1枚を渡す。最後の2枚のときは、「お手つき」してすぐに取り直しをすることはできない。また、同時「お手つき」のときは、審判預かりとする。

- カ 札を取るときは、押さえても、はじいても、押しても、引いてもよいが、故意にはじいたり飛ばしてはいけない。読まれた札以外の札に手が触れたときは、「おてつき」となる。ただし、「から札」を読んだときに札に触っても「お手つき」とはしない。
- キ 取り札に早く手が触れた方が勝ちとして札を取ることができる。

(4) 採点のとり方

ア 取り札は、1枚を1点として数える。ただし、団体戦の場合には、次のような「やく札」がある。

シンボル札

せ：富士山

に：ふじみん

り：新河岸川

イ 「やく札」3枚がそろったときには、10点を加算する。ただし、3枚そろわない場合には、普通の札と同じで1枚1点として数える。

ウ 団体戦・個人戦とも、同点の場合には、『よ』の札を持っている方のチームが勝ちとなる。

エ 得点の数え方は、試合終了後、取った札の枚数を確認し、記録表に記入する。次に『よ』札や「やく札」があるか確認し、記録表に記入する。この総合得点を計算する。

(例)

団体戦の場合、Aチームが取り札を21枚取ったとする。そのなかに「やく札」のシンボル札3枚がそろっていた場合、その得点は、21点+10点=31点となる。

相手のBチームは、44枚-21枚=23枚となり、「やく札」がなければ得点は23点だけなので、この試合はAチームの勝ちとなる。

5 審判員の役割

審判員の心得

審判は、常に公平に判断をくださるように心がける。万一、判断に苦しんだ場合には、すみやかに赤旗を上げ、進行係と密に連絡をし、試合の進行を考慮しつつ敏速に問題の解決にあたる。

試合上の注意事項

- ア 団体戦の出場選手の構成は、常に男女混合でなければならない。
- イ 試合中、始めに並べた札の位置を変えてはいけない。
- ウ 試合中に取り札が動いた場合、すみやかにもとの位置に戻す。

- エ 札を取るときは、両手を使ったり、札にかぶさったりしてはいけない。
- オ 札が読まれるまでは、手を膝の上から離してはいけない。また、ラインより膝と肘を出してはならない。
- カ 選手のだれかが、読まれた札以外の札に手を触れたら「お手つき」となる。「お手つき」をしたチームは、自分たちが取った札の中から 1 枚を相手チームに渡す。ただし、両方のチームが同時に「お手つき」をしたとき、または、取り札のないときは、渡す必要はない。
- キ 味方チームの 2~3 人が同時に「お手つき」をしても、相手チームに渡す札は 1 枚だけでよい。
- ク 取り札に両チームの人の手が重なったときは、重なった手の下の手のものが取れる。
- ケ 取り札に両チームの人の手が同時に触れた場合は、自分の陣内のものが札を取れる。ただし、団体戦のときに、その札が「やく札」の場合は、審判員が預かる。
- コ 予選ブロックの代表選出は、(1)勝ち数、(2)得点数、(3)対戦時の勝者の順とし、それでも決まらないときは抽選とする。(団体戦の場合は、代表 3 人で抽選し 2 勝で勝ちとする。)